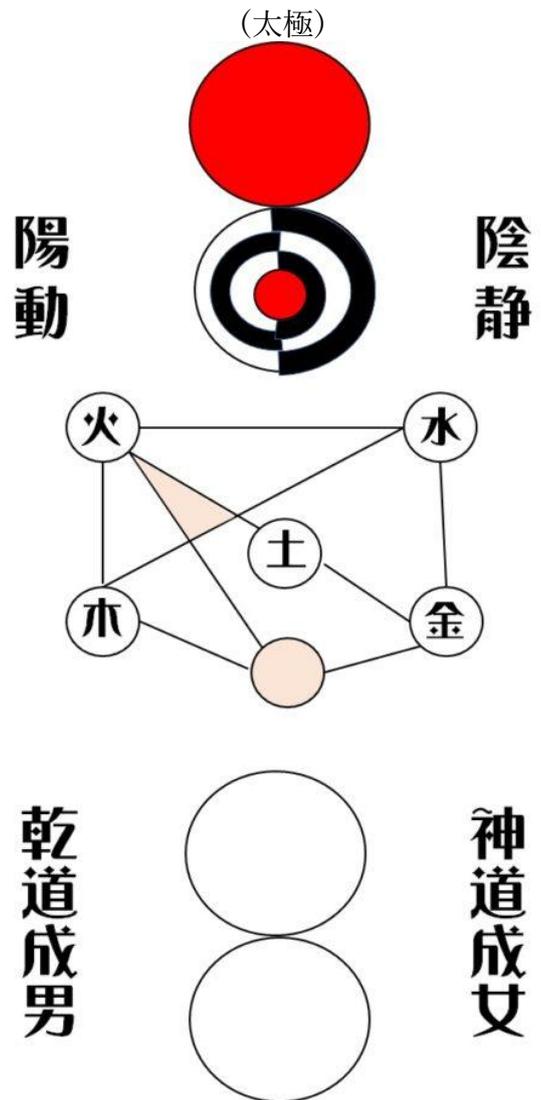


1. 「(中国古典) 太極 図説」 (図- 1)

『ウィキペディア (Wikipedia)』を参考にします。

無極にして太極 (混沌たる根元) なり。太極が動いて陽 (分化発動する働き) を生ず。動なること極まりて静なり。静にして陰 (統一含蓄する働き) を生ず。静なること極まりて復動く。一動一静、互いにその根となる。陰に分かれ、陽に分かれて、両儀立つ。陽が変じて陰と合して、水火木金土を生ず。五気 (水火木金土) が順に動いて四時 (四季) が行われる。これを五行と言うけれども、要するに一つの陰陽である。陰陽は一太極である。太極の本は無極である。五行が生まれるというけれど、各々その性質は常に必ず一になる。これが無極というものの真 (本質) である。二気 (陰陽) 五行 (水火木金土) の精 (エネルギー) が微妙に配合して形を凝る (作る)。乾道は男を成し、坤道は女を成し、この二気が交わり感じて万物化成していく。その万物は生々して変化窮まり無し。ただ、あらゆる生物が色々変化してきたが、人間というものだけがその中の一番秀れたものを得て、非常に霊妙である。その秀麗な形を生んで形の中に神 (精神の深奥) が知を発する。五性 (水火木金土) が感動して (感に動いて)、ここに善悪というものが分かれ、あらゆる人間活動 (万事) が出てくる。そうして最も秀麗にして神知を発した優れた聖人がこの万物生成化育の道を観察・開拓して、中正仁義というものを立てた。人間として如何に生くべきか (人極) は静 (含蓄・潜在) を主とする。故に聖人と天地とその徳を合し、日月その明を合し、四時 (四季=自然の道) は其その秩序に合致する。鬼 (創造の破壊作用) 神 (生命の進化助長作用) とその吉凶を合致する。君子これを修めて吉、小人これに悖りて凶。故に、天の道を立てて陰陽と言ひ、地の道を立てて柔と剛と言ひ、人の道を立てて仁義と言う。又、始めをたずねて終わりに返ることによって死生を知ると言う。大いなるかな易は。ここにそれ至れり。



生化物萬

図-1

2. (陰陽) 五行説へ

その1 ; 民俗学者の吉野裕子さんは「万物は交合によって生死・消長を繰り返すが、その作用——他のものに力を及ぼして影響を与えるという意味——の具象化が五行である。地球圏内五元素『木火土金水』中の2要素は互いに相生し、相克して万物を以って盛衰の輪廻を繰り返すが、人間もまたこの理法から逸脱出来ず、この原理に組み込まれている。」と非常に分かり易く説いて

います。私はそれを人間関係に当て嵌めて極々簡単に言えば、一つの「もの・こと」に対してもみな見解が違うのだということを認めた上で、相互に同等を以って相手を尊重する姿勢——対等互啓・共存の互惠を説いているものと理解しています。

別々に発生した「陰陽説、すなわち反発と吸引」と「五行説、すなわち循環」が融合し、万物万象を解く理論に発展しました。

「五」の起源については三つの見方が融合しています。

- 1；肉眼で観察が可能な五つの惑星、すなわち五星「水星・金星・火星・木星・土星」に淵源があるとする考え方です。
- 2；東西南北の四方に中央を加えたものという考え方（東 - 木、南 - 火、中央 - 土、西 - 金、北 - 水）です。
- 3；地球を構成する根源的要素は五元素「木、火、土、金、水』（ここでは星ではなく、鉱物的要素）とする考え方です。

宇宙の天空・天象においては、太陽（日）と太陰（月）の二つの天体が主役を成します。日は昼に光ります、月は夜に光ります、二つは対比（対照・対称）的です。それはすなわち日は陰陽の陽の象です、月は陰陽の陰の象です。陰陽と五星の結合は「日、月、木、火、土、金、水」と成って、曜日（7日間）の概念の基になりました。

よって、陰陽五行説を整理すると次のようになります。万物（もの・こと）は孤立単独に静止して存在せず、

- 陰陽の二元は同一ものに同時共存し、交合・交感——反発と吸引——が自生し、
- 五行はお互いに相生（相手を良い方向に助ける）し、あるいは相克（相手の動きを障害する）して、
- その陰陽五行が絡み合っ、て、生死・生成化育・栄枯盛衰が循環する。

という原理を解いたものです、人間といえどもこの原理の渦中から離れることは出来ないという哲学です。

その2； この世の森羅万象、万物および人間は、諸々の要素が絡み合っ、て生じていますが、陰陽五行「日月木火土金水」の申し子であります。陰陽五行説とはい、うが、根本は宇宙における森羅万象を陰と陽の二元で捉える思想です、天象には太陽（日）と太陰（月）の二元があり、人象には男女両性がある。この陰陽ワンセットは互いに交感・交合して万物は生成化育、栄枯盛衰を繰り返すというのであります。宇宙の「宇」は四方上下の空間で、「宙」は古から今に至る時間である。宇宙も空間と時間の二元であり、空間も東西（左右）、南北（前後）、上下の二元、時間にも過去と未来の2元の相対で為っています。この相対の中には必然的に「中央」が意識され、空間にも中心があり、時間には今があります。このような説明は、「分別知」と裏腹の関係にあります。陰陽二元は、「分別知」を開いて行く「基点、トリガー、根源」ということです。

そのイメージ図を図-2に記述します。

その3；図-3において、三（分割）の次は万物で五（分割）になっています。この五（分割）は五行に他ならない、五行は万物を包含する分類のカテゴリーである、と云われます。

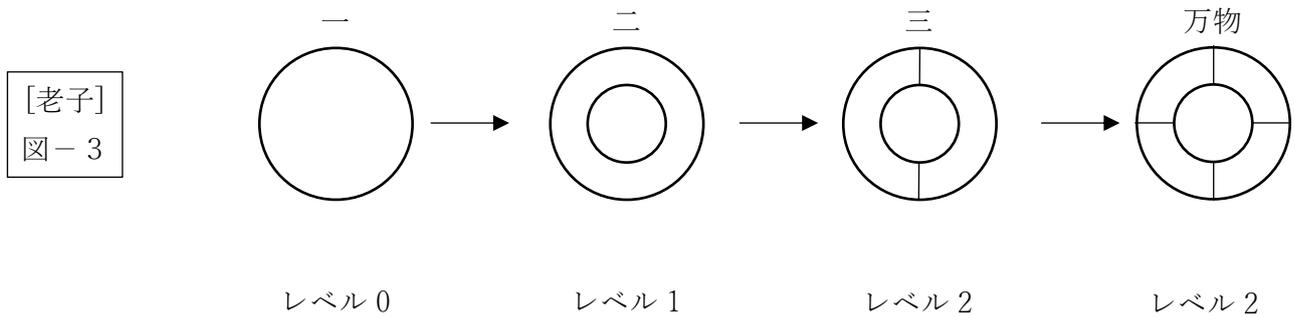


図-4は「土」を中央において、「木火土金水」は地球の基本元素、その内の「木火金水」4元素は『土』の中に生まれるとします。陰陽「二分割と三分割」中における三分割の発展形で外円の二分割をさらに二分割したとも解釈出来ます。なお、仏教で、智慧を大円鏡に譬えた「大円鏡智」の考え方——仏の四智の一つ。密教では五智の一つ——があります、傷のない、曇りのない、澄み切った大きな丸い鏡が万物の形をそのままに映すように、すべての真実を正確に照らす智慧を意々ます。相手を論破しよう、恐喝・強権を以って屈服・従属させようとしたその瞬間、「有限知」の先入観で判断しようとする偏見が立ちだかっただも同然となります、すなわち、直前まできれいだっただ鏡に自ら傷を付けて曇らせたも同様に、真理を見通す力が塞がれて、自業自得の呪縛で苦しむこととなります。

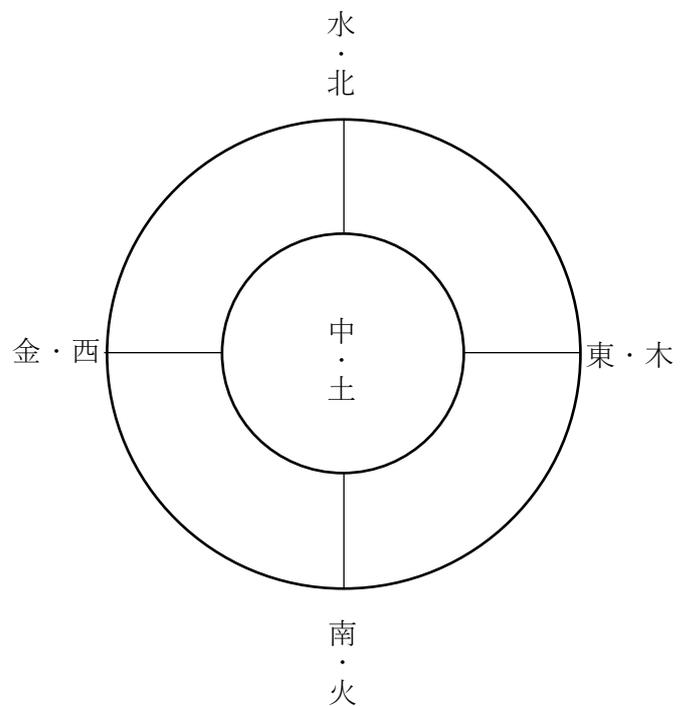


図-4

その4；次頁図-5は、「木火土金水」の五行（五元素）の相関で蠢く相生・相克の関係性を表しています。

右記、陰陽五行説の基本サイクルに反抗する私説

右相生の中にも相剋がある。

- ①!火の勢いが増せば、木は早く燃え尽きる
- ②!燃え出た灰(土)が固まると、火の勢いが衰える
- ③!金属(鉱石)を取り過ぎると土が減る
- ④!水に長く浸たされた金属は錆びる
- ⑤!木を増やせば吸い取られ水が減る

右相剋の中にも相生がある。

- Ⓐ!土は木の根が張れる状態を供する
- Ⓑ!水は岩石を砕いて土を作る
- Ⓒ!火は熱く水を蒸気に変える
- Ⓓ!金属は火の勢いを殺す壁となる
- Ⓔ!木は柔らかく、金属で加工され易い(木は金の力を引き出す)

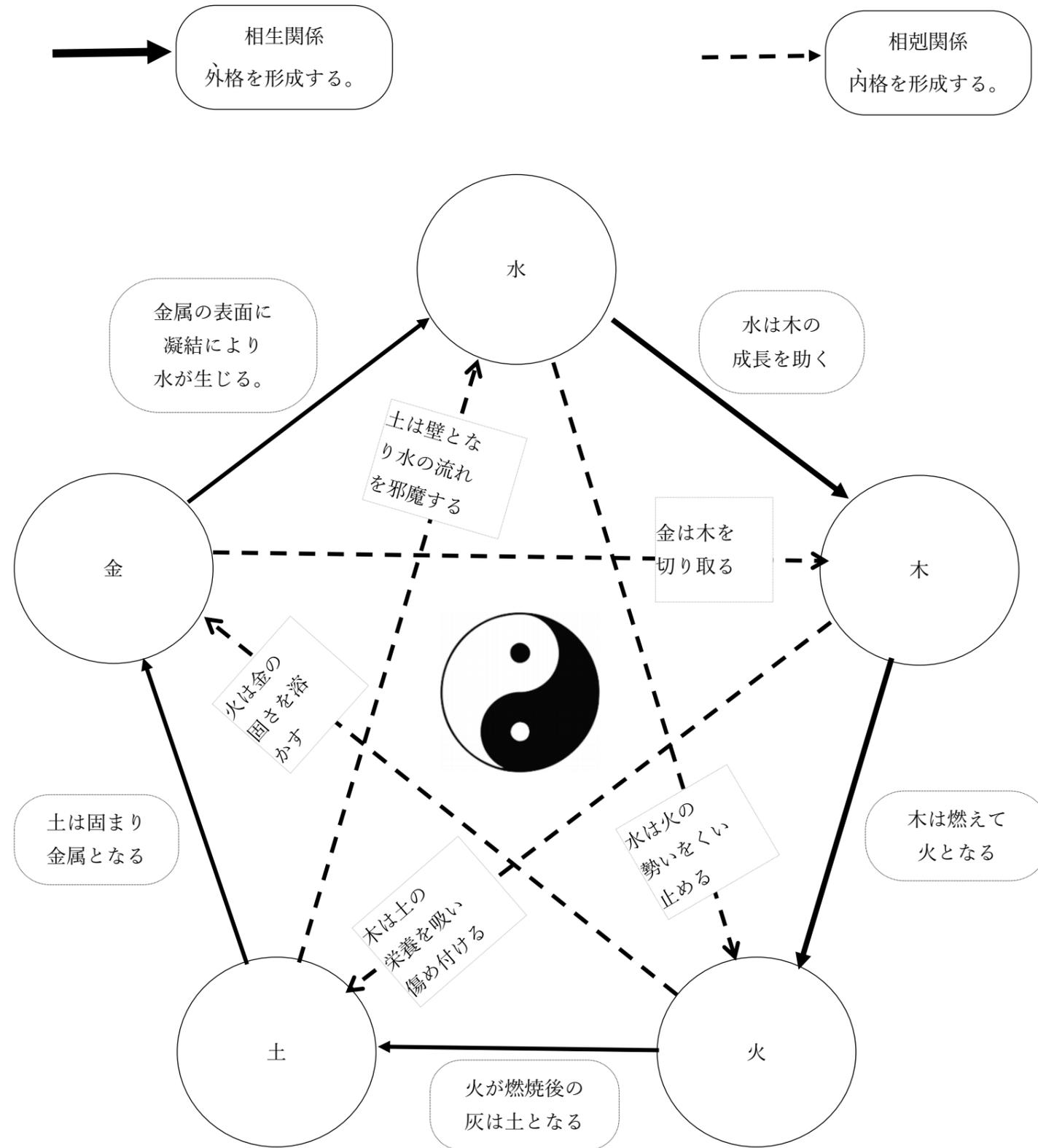


図-5

陰陽五行説の基本サイクル(公説)

相生関係(肯定性)とは、相手を生み出して行く、永遠の生成。

五角形の外側の関係

- ①木生火
- ②火生土
- ③土生金
- ④金生水
- ⑤水生木



相剋関係(否定性)とは、相手を打ち滅ぼして行く、無限の対立。

五角形の内側の関係

- Ⓐ木剋土
- Ⓑ土剋水
- Ⓒ水剋火
- Ⓓ火剋金
- Ⓔ金剋木

その5；

干支陰陽五行説への派生発展です。

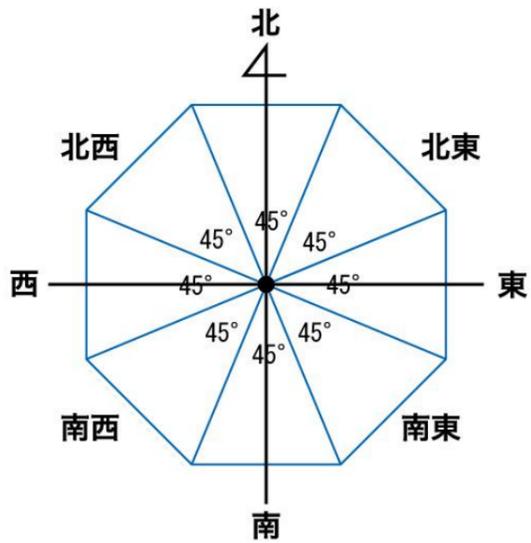
基本的対応関係は図(表)－6のとおりです。

図(表)－6													
十二支					十干				陰陽五行				五色
寅	とら	いん	③	陽の木であり春季の 緑樹を象徴する	陽	甲	こう	陽の木であり大樹を象徴する	陽(兄)	木の兄	きのえ	木	青
卯	う	ぼう	④	陰の木であり春季の 若草を象徴する	陰	乙	おつ	陰の木であり草花を象徴する	陰(弟)	木の弟	きのと		
午	うま	ご	⑦	陽の火であり夏季の 劫火を象徴する	陽	丙	へい	陽の火であり太陽を象徴する	陽(兄)	火の兄	ひのえ	火	赤
巳	み	し	⑥	陰の火であり夏季の 燎火を象徴する	陰	丁	てい	陰の火であり火炎を象徴する	陰(弟)	火の弟	ひのと		
辰	たつ	しん	⑤	陽の土であり春季の 丘陵を象徴する	陽	戊	ぼ	陽の土であり山脈を象徴する	陽(兄)	土の兄	つちのえ	土	黄
戌	いぬ	じゅつ	⑪	陽の土であり秋季の 台地を象徴する									
丑	うし	ちゅう	②	陰の土であり冬季の 土壌を象徴する	陰	己	き	陰の土であり大地を象徴する	陰(弟)	土の弟	つちのと		
未	ひつじ	び	⑧	陰の土であり夏季の 大地を象徴する									
申	さる	しん	⑨	陽の金であり秋季の 金鉱を象徴する	陽	庚	こう	陽の金であり鉱石を象徴する	陽(兄)	金の兄	かのえ	金	白
酉	とり	ゆう	⑩	陰の金であり秋季の 宝玉を象徴する	陰	辛	しん	陰の金であり玉珠を象徴する	陰(弟)	金の弟	かのと		
子	ね	し	①	陽の水であり冬季の 氷雪を象徴する	陽	壬	じん	陽の水であり大河を象徴する	陽(兄)	水の兄	みずのえ	水	黒
亥	い	がい	⑫	陰の水であり冬季の 霜雪を象徴する	陰	癸	き	陰の水であり雨水を象徴する	陰(弟)	水の弟	みずのと		

図(表)－7

番号	干支	音読み	訓読み	番号	干支	音読み	訓読み
1	甲子	こうし	きのえね	31	甲午	こうご	きのえうま
2	乙丑	いっちゅう	きのとうし	32	乙未	いつび	きのとひつじ
3	丙寅	へいいん	ひのえとら	33	丙申	へいしん	ひのえさる
4	丁卯	ていぼう	ひのとう	34	丁酉	ていゆう	ひのととり
5	戊辰	ぼしん	つちのえたつ	35	戊戌	ぼじゅつ	つちのえいぬ
6	己巳	きし	つちのとみ	36	己亥	きがい	つちのとい
7	庚午	こうご	かのえうま	37	庚子	こうし	かのえね
8	辛未	しんび	かのとひつじ	38	辛丑	しんちゅう	かのとうし
9	壬申	じんしん	みずのえさる	39	壬寅	じんいん	みずのえとら
10	癸酉	きゆう	みずのととり	40	癸卯	きぼう	みずのとう
11	甲戌	こうじゅつ	きのえいぬ	41	甲辰	こうしん	きのえたつ
12	乙亥	いつがい	きのとい	42	乙巳	いつし	きのとみ
13	丙子	へいし	ひのえね	43	丙午	へいご	ひのえうま
14	丁丑	ていちゅう	ひのとうし	44	丁未	ていび	ひのとひつじ
15	戊寅	ぼいん	つちのえとら	45	戊申	ぼしん	つちのえさる
16	己卯	きぼう	つちのとう	46	己酉	きゆう	つちのととり
17	庚辰	こうしん	かのえたつ	47	庚戌	こうじゅつ	かのえいぬ
18	辛巳	しんし	かのとみ	48	辛亥	しんがい	かのとい
19	壬午	じんご	みずのえうま	49	壬子	じんし	みずのえね
20	癸未	きび	みずのとひつじ	50	癸丑	きちゅう	みずのとうし
21	甲申	こうしん	きのえさる	51	甲寅	こういん	きのえとら
22	乙酉	いつゆう	きのととり	52	乙卯	いつぼう	きのとう
23	丙戌	へいじゅつ	ひのえいぬ	53	丙辰	へいしん	ひのえたつ
24	丁亥	ていがい	ひのとい	54	丁巳	ていし	ひのとみ
25	戊子	ぼし	つちのえね	55	戊午	ぼご	つちのえうま
26	己丑	きちゅう	つちのとうし	56	己未	きび	つちのとひつじ
27	庚寅	こういん	かのえとら	57	庚申	こうしん	かのえさる
28	辛卯	しんぼう	かのとう	58	辛酉	しんゆう	かのととり
29	壬辰	じんしん	みずのえたつ	59	壬戌	じんじゅつ	みずのえいぬ
30	癸巳	きし	みずのとみ	60	癸亥	きがい	みずのとい

8等分



12等分

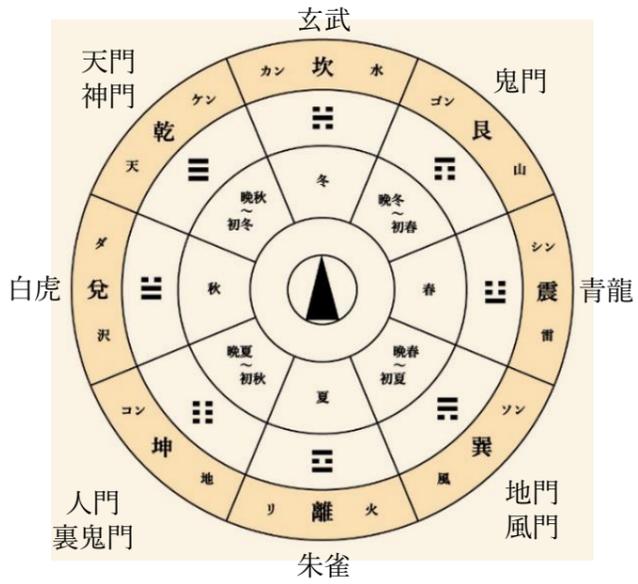
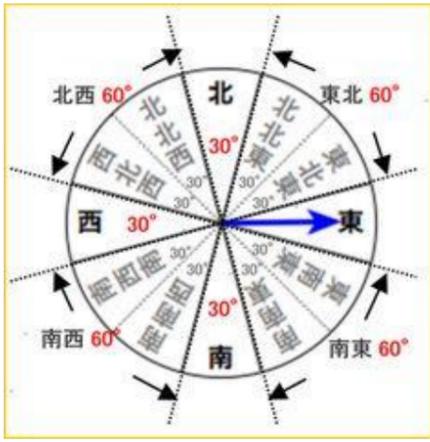


図-13a

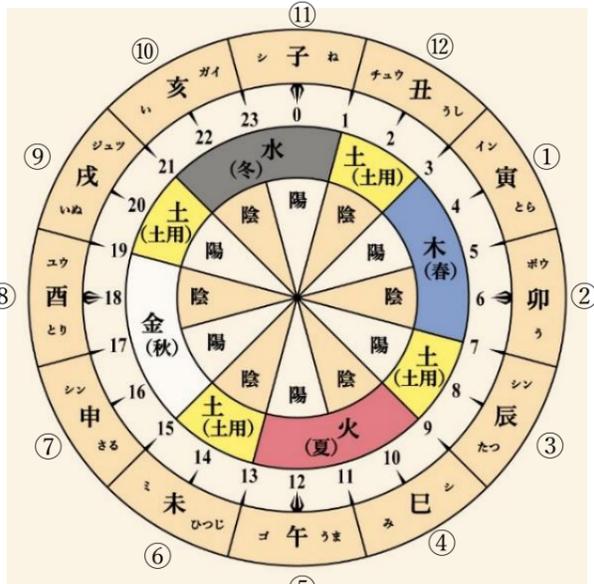
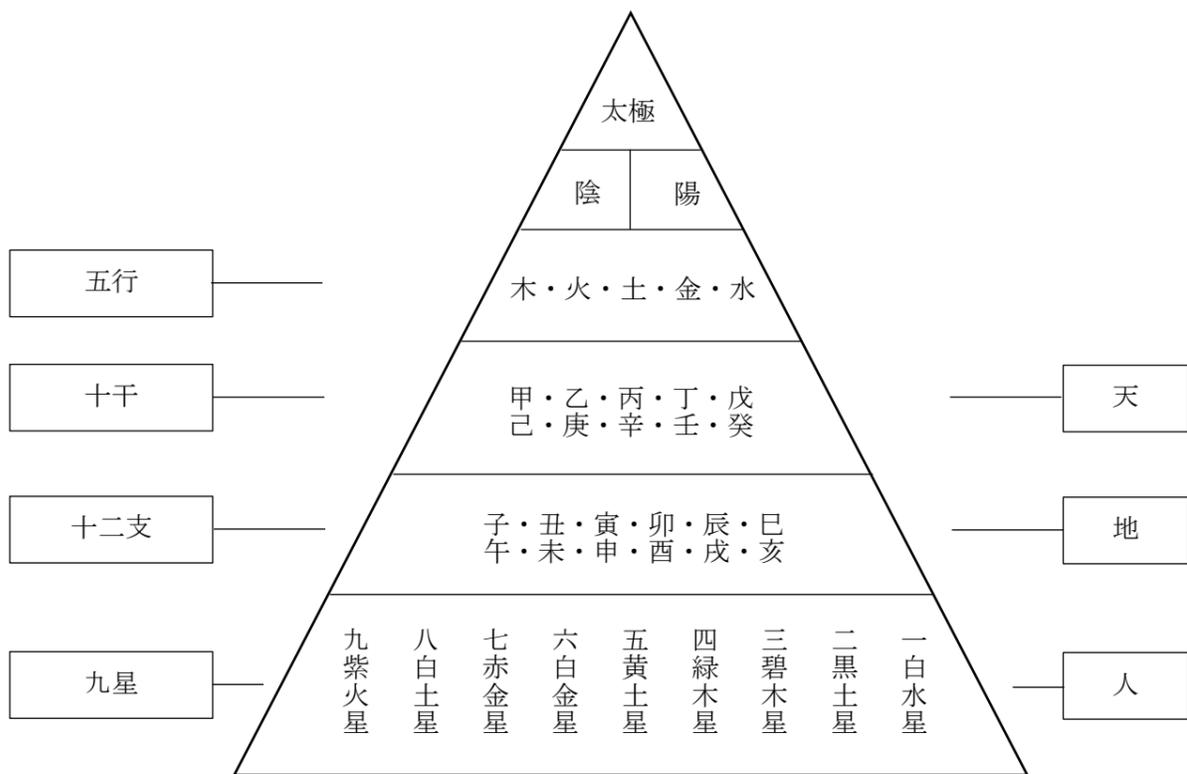
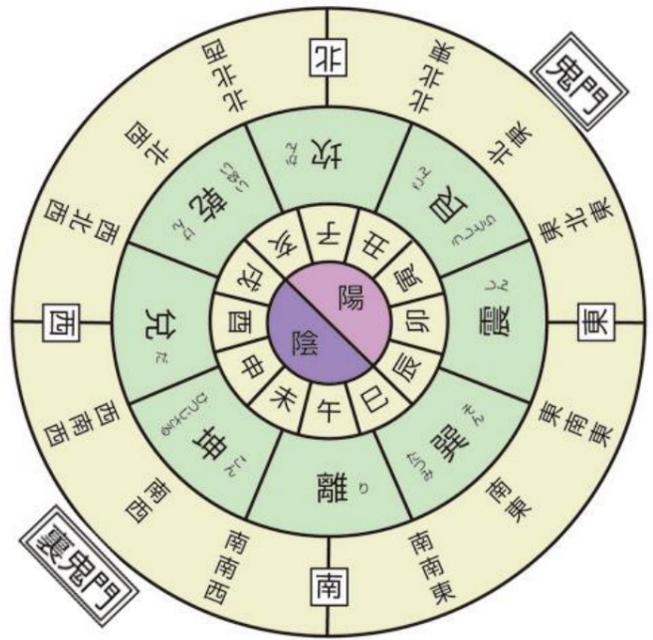
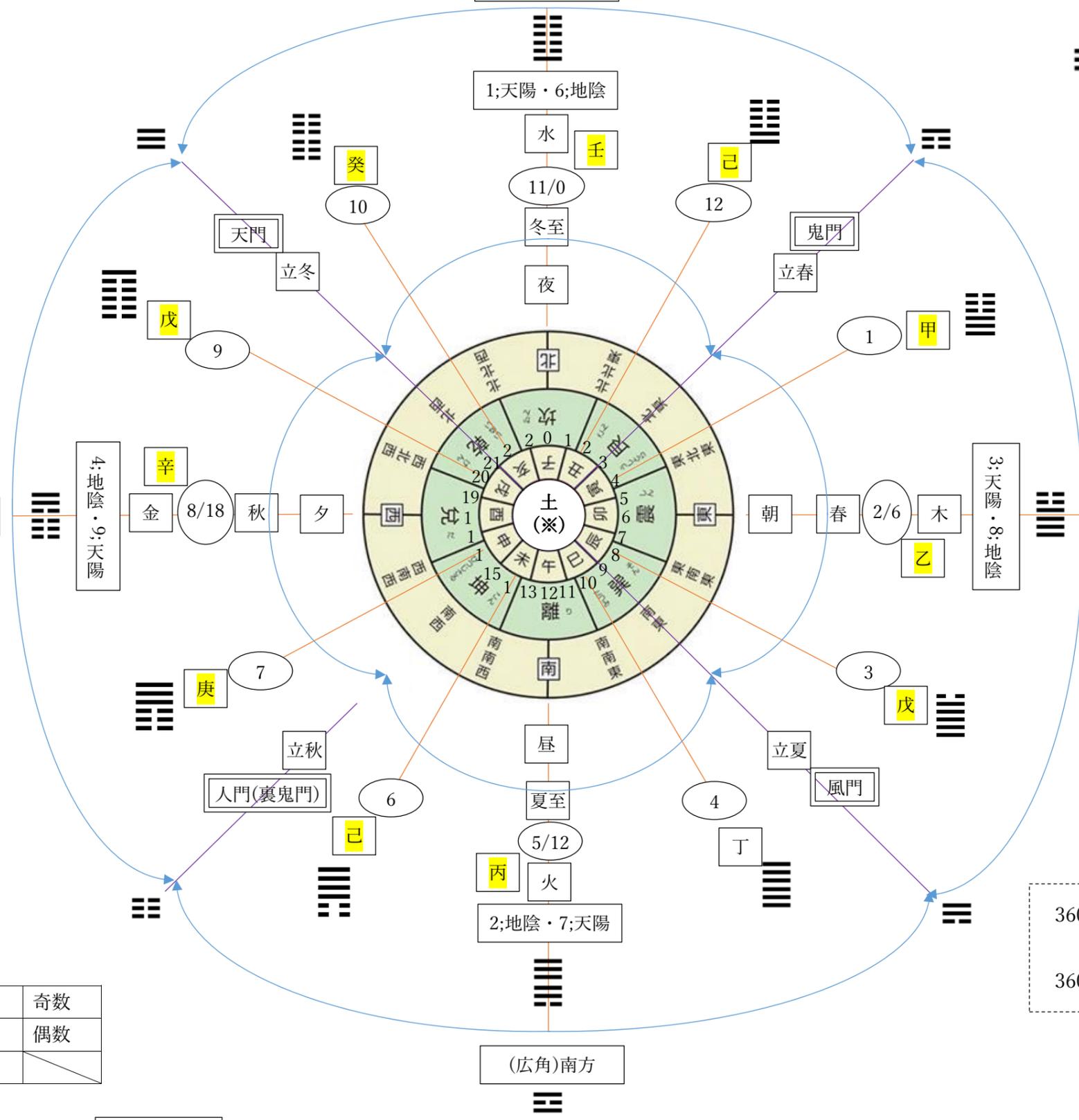


図-13b





「太一」「太極」 = 「北極星」※



楯円内数字は旧暦月
ただし、スラッシュ右は時刻

(※)「土」
5;天・陽、0;地・陰

360度 ÷ 8 = 45度
45 ÷ 2 = 22.5
360度 ÷ 12 = 30度

天=陽	1	3	5	7	9	奇数
地=陰	6	8	10	2	4	偶数
五行	水	木	土	火	金	

図-8